

日中活動の場における支援形態のあり方を考える

—複数の集団に属することの意味を中心に—

社会福祉法人八千代翼友福社会
友愛みどり園職員研究集団

はじめに

生活介護事業「友愛みどり園」では、開設当初から利用者はそれぞれ複数の集団に属して活動する形態をとってきました。また、支援員は複数の「領域」を複数の職員で担当し、多様な視点で利用者支援するよう努めてきました。開設から11年経った一昨年度、「次への飛躍」を期し支援態勢の見直し作業を行いました。その中で改めてこの活動・支援形態の持つ意味を確認することが出来ました。

「日中活動の場」といっても、様々な制度・形態があり、また置かれている条件も異なりますので一概に「最適な活動形態」と呼べるものはないのかもしれませんが、しかし、どのような活動形態をとるのには、「選択する余地」がなくその「場」を利用している重度の知的障害者にとっては重要な問題となります。活動形態のあり方、とりわけ利用者が複数の集団に属することの意味を中心に考えたいと思います。

1. 友愛みどり園の支援・活動形態とその変化

現行の支援・活動形態は次の通りです。

(週の流れ)					
	月	火	水	木	金
8:30～	送迎				
9:00～10:30	ホーム				ホーム
10:30～12:00	生産活動				
12:00～13:00	昼食・歯磨き・休憩				
13:00～15:00	生産活動	特別活動	生産活動		
15:00～15:30	ホーム				
15:30～	送迎				

利用者は、各々「ホーム」と「活動班」に所属している。

ホーム 7人から13人で構成される5グループがある。
友愛みどり園での生活の基礎集団と位置づけられ、「家族的な関係」を重視している。
主な活動は、朝の体操やミーティング、午後のティータイム。金曜日の外出、調理、創作活動等。

生産活動班 「陶芸」「木工」「織物」「食品」「農園芸」の5グループがある。
友愛みどり園での「会社」と位置づけられ、7人から14人の「社員」で構成される。

特別活動 水曜午後のプログラムで、週によりプール、サークル、コンサート等が設定される。
サークルは、「スポーツ」「音楽(演奏)」「音楽(リトミック)」「造形」「パソコン」があり、
回ごとの選択制としている。

※「ホーム」の構成メンバーは固定制としている。「様々な人たち」で構成されている。
「生産活動班」メンバーは、年度ごとの希望制としているが、近年は「得意なところを生かす」、「職人をめざす」ということで「異動」は少なくなっている。結果として、「同一特性」に近いメンバー構成となっている班もある。

※職員は最低、ホーム・生産活動班・サークルという「生活」「労働」「文化」の3領域を担当する。
その他、自治集団^①の援助やボランティア活動班の担当を担うこともある。

このかたちは、平成14年開所した当時と基本的には変わっていません。^②ただ、一昨年度までは「大人としてハタラク」ということで生産活動は大切にしていたものの、「生活活動」を重視していたため、現行よりも多くの時間を「ホーム」活動に充てていました。その中で、「ボランティア活動」も含め様々

な活動を展開し、「側楽^{ハダラク}」（当法人の独自用語）の意味を深めてきました。④ また、利用者の年齢層も「働き盛り」という面もあり、プログラムを「生産活動重視」へとシフトしようという事になり、1年間をかけて職員全体でプログラムの見直し作業を行いました。この中で「当たり前の支援形態」としてきたことの中に含まれている意味を再確認することが出来ました。

2. 振り返ること明らかにになった集団の良さ

先ず私たち職員研究集団は、みどり園の「日中活動の場」であるそれぞれの集団を振り返ってみました。改めて集団を振り返ることで、それぞれの集団の良さを確認することができました。また、ざっくばらんに意見を出し合うことで、職員ひとり一人の視点や職員集団としての視点も確認することができました。とても大切に貴重な時間だったと思います。

その時に出た意見は下記のようなものでした。

○ホームの良さ

- ・居心地が良く、安心できる空間。
- ・自分を出せる場。
- ・家族的な仲間がいる
- ・自分の居場所
- ・お互いさまを共有し合える
- ・団結できる
- ・文化やあそび等のこれまであまり経験してこなかったであろう経験ができる場

等等

ホームでは、居心地や自分が出せる場として、生活の基礎となる集団であることが分かります。ホームの仲間となら本音を話せるといったように、実際には楽しい話から愚痴？話まで聞かれます。長年一緒に生活している仲間だからこそ、時には団結し、時にはお互いさまと許し合える関係が築けています。また活動内容が緩いため、様々な面で個々の主張が見られます。結果として、安心できる場所であったり、仲間関係を大事にできる場所となっています。

○生産活動の良さ

- ・メリハリ、やるべきことがあり、集中できる場
- ・仲間と共働し、他者を意識し、憧れ、ライバル心が見られる場
- ・社会との繋がり（施設以外の人との繋がり）が持つ、やりがいがある
- ・作業技術の習得
- ・販売しその喜びを分かち合うことができる場
- ・「私もがんばらなきゃ！」という仲間の影響を受ける
- ・仕事への責任感

等等

メリハリというのは、やる時はやる！といった厳しい面もありますが、作業の時間ずっと集中して作業をするのではなく、休憩をはさみながらその人のペースに合わせて作業をするということを言っています。また、仲間への憧れやライバル心といった仲間に対する意識においても生産活動ならではの様子です。仕事をするにあたり技術の習得から、手応えや責任感を感じられ、生産活動の場が施設内で終わらず、地域社会とのつながり（社会貢献）になっていくものとして活動（仕事）を行っています。ホームとは少し異なりアクティブな面が特徴的です。生産活動とは、成果物をつくり、それに対する貢献度で個人が評価される集団です。同時に明確な目的がある『目的集団』といえます。適切な課題により、一人ひとりの目的が明確になることで、課題に対して真剣に取り組めるのだと思います。

○サークルの良さ

- ・自分がやりたい活動を選べる
- ・葛藤できる魅力的な活動
- ・ある程度の自由
- ・技術を獲得できる
- ・仲間と楽しみを共有し合う

等等

サークルを楽しみにしている人や、決めるのに葛藤する人などといった、普段は見られない姿を見ることがあります。ある程度自由で、柔軟な活動集団として、利用者は「今日はどんなことをやるんだろう？」と、活動に期待したり「頼まれた仕事をやろう！」と、以前職員から頼まれた仕事を、責任を持って頑張ることができる場です。楽しかったり、嬉しかったり、好きだったりする利用者の想いを実現する集団です。

3. 複数の集団に所属していることによる「効果」

複数の集団に所属することで、利用者は様々な顔を見せてくれます。所属するそれぞれの集団でキャラクターが違ったり、周りの仲間の変化や雰囲気によっても違いが見られます。また、明確な見通しなどがある活動の方が集中したり、落ち着けるという方もいます。そんな集団によって違った顔を見せてくれた利用者の様子を、エピソードを交えて報告致します。

- ・ホームと生産活動で違った顔を見せてくれる人

エピソード1

ホームでは積極的にお姉さんのような関わりを見せてくれる A さん。仲間の B さんのペースを見つつ、スムーズに動けるように声をかけながらサポートをしてくれたり、先を見通して行動してくれています。とても積極的に、自分から仲間に関わろうとする姿がみられます。

しかし、生産活動では、作業に集中し過ぎてしまい、周りを見ることもなく仕事をしています。生産活動になると、仲間との関わりもあまり積極的とはいえません。

ホームとは、自分自身を出せる環境であったり、付き合いの長い仲間との信頼関係が築ける場です。環境が整っていて、関係が築けているからこそ、安心感が生まれるのだと思います。また逆に生産活動では積極的でも、ホームではそうでないといった方もいます。いずれにしても、ホームと生産活動という違った集団で、自分（キャラ）を使い分けていることが分かります。

エピソード2

C さんは「自治集団きらら」にも所属していて、準備や話し合いで忙しい方です。ホームでも役割があるため、お昼休みに決まってやる日記を書く時間も持てないことがあります。金曜日は昼休みの時間が長く設定されているため、ゆっくりと好きな日記を書く姿が印象的です。そんな週末のある日、早々に大好きな日記を書き終えると、ソファでゆっくり休む姿がありました。職員が話かけると、体調が悪いわけではなく、「毎日仕事で疲れました～」と答えが返ってきました。

C さんが、職員に「…疲れました～」と伝えてくれたのはとても嬉しいことでした。その時、職員は叱咤激励をするのではなく、「そうだね、疲れたでしょう。ゆっくり休んでください」と、C さんの気持ちに共感するやりとりがあったことでしょう。

生産活動などでは、いつも一生懸命で寡黙な C さんが、思わず漏らしてしまった一言は、安心できるホームだからこそ出た言葉であり、また関係ができたホームの職員だからこそ言えた愚痴なのだと思います。C さんにとって、ホーム＝安心できる場であり、生産活動＝頑張る場、といった違った顔を出せる複数の集団があるからこそ、辛いときははっきりと自分のことを伝えられたり、時には辛くても頑張れる姿に繋がるのだと思います。

エピソード3

D さんは、朝の送迎バスから降りると園内を歩き回ります。職員の声かけで着替えやミーティングへの参加も出来るのですが、ホームで一人のんびりという姿はあまりみられません。自分のホームだとい

うことは理解していながらも、何をすべきかが見つけられないようで、どこか困った様子です。

しかし、生産活動が始まると表情は一変し、働く男の顔になります。Dさんは農園芸班に所属し、広い畑で次から次へと一輪車を押し、仕事に励んでいます。仕事の合間にも困った様子は見られず、次の出番に備えています。

Dさんにとっては空間（適切な広さ）もさることながら、やるべきことが明確に決まっている生産活動での場面のほうが、気持ちの面で楽なのかもしれません。

しかし、メリハリのある生産活動だけの生活では、息が詰まってしまいます。ゆったりとしたホームがありながらも、メリハリのある生産活動があることで、日常の生活が豊かになってくるのだと思います。

・ホームや生産活動での経験が他の場面で表れた人

利用者はそれぞれの集団で、様々な経験をし、手応えを感じたり、学んだりし、それを力として発揮してくれています。発揮する力や場面は個人によって様々ですが、複数の同質または異質の集団を保障することで、生活が豊かになるのではないのでしょうか。ここでは、『ホームや生産活動での経験が他の場面で表れた人』の姿を、エピソードを交えて報告したいと思います。

エピソード 4

生産活動では、一番年下で内気な性格な E さん。周りの仲間は、そんな E さんの世話を焼いてくれます。お姉さんたちに甘えている E さんの姿もよく見られます。

しかし、ホームでは、周りの仲間をまとめよう声をかけ、生産活動の様子とは逆に仲間の世話を焼こうと、自分から進んで行動してくれます。そして、ホームでは「パソコンがやりたい!」、「CD が聞きたい!」などと、自分の要求や要望も以前とは比べ物にならないほど、はっきりと伝えてくれるようになりました。

E さんがこういった姿をみせてくれるようになったのは、生産活動で周りの仲間から『~をしてもらっている』経験や、『あの人のようになりたい! あんな風にやってみたい!』と、E さんが憧れを抱いたからではないのでしょうか。そんな自分にとって刺激のある集団が、E さんを成長させているのだと思います。

エピソード 5

ホームでは、月に一度の外出や調理の内容を、ミーティングで決めています。ミーティングでは利用者からの意見を引き出すために、こちらから提案したり、代弁などを通して行っています。

F さんは、発言することが苦手な方です。周りの仲間を巻き込みながら、F さんが好きそうな調理の内容を何点か挙げて、選択してもらおうようにしました。

F さんは、自分が好きなものということもあり、時間はかかりましたが、選ぶことが出来たのです。職員は、F さんのそんな様子を見て、選択してもらおうという取り組みを続けてきました。

そして、ある時、週に一度のサークルの場面で、自分でどこに行きたいのかを、決めている姿がみられました。

自己決定を尊重してもらえた経験をしたことで F さんはサークルを選ぶことができたのだと思います。また、サークル以外でも、自分が何をしたいのかを考えている場面が見られるようになってきました。ホームや生産活動という場で様々な経験をすることで、いつもと違った場や集団でも力を発揮することができるようになるのだと思います。

エピソード 6

この日のホームの活動は畑の整備です。自分たちで野菜を育てるために小さな畑をつくろうという作業です。スコップで土を掘り返したり、園の畑から運んできたりと、農園芸班に所属する G さんにとっては「いつもと同じような仕事」と映ってしまったかもしれません。

しかし、いざ作業が始まると、次から次へと黙々と作業を進め、終わるたびに職員の言葉を待つようにジッと見つめてきます。もちろん職員もそんな G さんの姿を見て「G さん! すごいですね! ありがとうございます!」と褒め称えます。すると、G さんはニコッと笑い応えてくれました。

いつもは、なかなかホームの活動に参加ができないGさんですが、生産活動で培った力を、畑の整備で発揮する姿は、とても感動しました。Gさんは、ホームの仲間の前で「オレはこんなにできるんだぞ！」という所を見せたかったのではないのでしょうか。ホームの仲間の前で頑張っているところを見せることができたGさんは、その後の生産活動でもメキメキと頭角を現し、大活躍してくれています。

4. 考察

ここからは、前章で挙げられたエピソードから、複数の異なる集団に属することの必要性について、様々な経験（時間、空間、人間）をするための集団と集団が創り出す雰囲気という二つの側面から考察していきたいと思います。

① 新たな力を蓄えるための集団と力を発揮するための集団

前述のエピソードから、それぞれの集団が利用者にとってどのような意味を持っていたのかを確認することとします。

エピソード4のEさんは同じ生産活動班の「お姉さんたち」にお世話されることで刺激を受け、自らも「あの人がみたいになりたい」「私にも出来るかも」といった憧れのような感情が芽生えたのだと思います。そして、ホームの中で見事に自分が「お姉さんたち」になりかわって見せたのです。これは生産活動班のメンバーの中では見られなかったことかもしれません。憧れのお姉さんたちがいないホームの中だからこそ出てきた行動であると思います。

エピソード5では、自分の意見を持ちながらも、なかなかそれを伝えられないでいたFさんの自己主張（要望）に対し、尊重し受け入れるといったことを繰り返してきました。このような成功体験が積み重ねられたことにより、Fさんは徐々に自分の意見に自信を持つことができ、更には他の場面においてもその力を発揮できたのだと考えられます。

この2つのエピソードのように、経験によって得た「新しい刺激」はしっかりとインプットされていたのです。このような経験が、利用者がこれまで内面において燻らせていた力、または新しく獲得した力の芽生えに作用したのだと考えます。

しかし、力をつけた（あるいは持っている）だけでは、その力は確かなものとは言い切れません。エピソード6では、日頃から行っている作業を、違った環境（メンバーや場所）で行い、それを評価されることにより、確かな力にすることができました。このように、これまで燻っていた力、または新しい経験による刺激（インプット）によって芽生えた力を発揮（アウトプット）することのできる場として、Gさんにとっては「別集団」が必要であったと考えられます。

これらのエピソードから読み取れることとして、利用者にとって以下のような質を持った集団が必要であると考えられます。

◎刺激をインプットするための集団

（憧れ、成功体験、潜在的な力）

◎インプットした力をアウトプットするための集団

このように質の異なる集団の必要性もさることながら、インプットした刺激を力に変えるための取り組みは必要不可欠です。エピソード5でも、Fさんの本来持っていた自分の意見に対し、職員はそれを見つけ、引き出すために、選びやすい環境への配慮、信頼関係づくり、叶えてあげるといったことを繰り返してきました。

上記のことから、集団や取り組みの大切さに気付くことができました。

しかし、友愛みどり園の利用者全てが集団を有効に使い分けているわけではありませんでした。

ここからは友愛みどり園利用者の多くの方に共通する「雰囲気」によって変化する集団の必要性について考えていきたいと思います。

② 緊張と弛緩

友愛みどり園の柱となる集団である「ホーム」と「生産活動」、この2つの集団にはそもそものねらいの違いがあります。「ホーム」はその名の通り「家」であり、家族的な雰囲気としながら、のんびりとした生活の中で仲間や職員との関係を大事にしてきました。

反対に「生産活動」は、仲間というキーワードは持ちつつも、側楽（はたらく）ことや製品をつくる・販売するといった、目的がハッキリとした集団と言うことが出来ます。

上記の二つを比較してみても、ホームのようにホッとできる・のんびり出来る集団（弛緩）と目的に

向かうために頑張ることも必要である集団（緊張）と、それぞれの集団の持つ要素に違いがあります。

エピソード1、2からもわかるように、AさんやCさんのように安心して自分らしくいられるホームと「頑張らなきゃ」といった様子で緊張感のある生産活動などそれぞれの集団が持つ雰囲気を感じ取り、自らの緊張と弛緩の切換えの為に別の集団を望んでいるようにも見る事が出来ました。

しかし、それとは逆にエピソード3のように、仕事という緊張感の必要な場面で、目的に向かう過程に見通しを持つことで、自分のやるべきことがハッキリし安定することが出来る方や、のんびりした空間では自分が何をすべきかが分からなく不安になってしまう方がいました。

このように、緊張と弛緩についても、利用者にとって捉え方はそれぞれであるということがわかりました。

当たり前のことですが、利用者の感じ方には個人差があります。エピソード3で紹介したDさんとは別に、やはりのんびりした雰囲気のほうがリラックスできる方や、仕事という緊張から解放されるための「ホーム」を求める方も多くいました。

利用者それぞれが集団の持つ雰囲気を感じ取り、自ら選択できるためにも以下のような複数の異なる集団を用意する必要性があると考えられます。

◎リラックスできる集団

◎緊張感のある集団

5. 職員の視点として

ここまでは「利用者」にとっての、複数の異なる集団に属することの必要性について考えてきましたが、今回の研究に伴いこれまでの取り組みを見直してきたところ、私たち職員にとっても複数の集団での活動が有効だったことも確認することが出来ました。

友愛みどり園では、一人の利用者を一人の職員が担当するといった「担任制」を採用していません。このことは、利用者やご家族にとってみれば、学校や他の事業所では「誰が自分（の子）を見てくれている」ということがハッキリしている、という分かりやすさから安心感もあったと思います。逆を言えば、担任制を採用しない友愛みどり園の支援体制に不安を感じていた方も少なくないと思います。

しかし、私たちは敢えて「チーム支援」を取り入れてきました。ここからはチーム支援の良さについて触れていきたいと思います。

友愛みどり園の日中活動の集団（グループ）は、大きくは「ホーム」「生産活動」に分かれていると言えます。ホームはそれぞれ2～4名の職員で担当し、生産活動においても2～5名の職員で担当します。一人の利用者の目線で見ると、多い方はホームで4名、生産活動で5名、合わせて1日9名の職員に担当されるという事です。それぞれの職員が係わる時間としては、決して多くはないかもしれませんが、それだけ多くの目が利用者に向けられていることとなります。多くの目があるということは、多くの見え方、見方ができると考えられます。

また、職員にとっては、違った集団にいる時の利用者の様子を知ることにも繋がり、ホームでしか見せてくれないやわらかい表情、生産活動でしか見ることが出来ない真剣な表情など、利用者の新しい一面を知る機会になっています。

集団が常に同じであることは、利用者や支援員にとって毎日同じ顔ぶれとなります。もちろん、関係性を作り上げる過程で一緒に過ごす時間が長いことは良いことかもしれませんが、しかし、人と人との関係を見た時に、誰もがその場にいる人に信頼を寄せる、または心許せる存在になれるとは言えません。

利用者との信頼関係を築きたい、と思わない支援員はいないはずですが、利用者もまた信頼できる支援員を望んでいるはずですが、しかし、私たち支援員が望む関係性と利用者が望む支援員像は、多少なりともずれているのが当たり前なのではないでしょうか。

利用者の一日の生活を振り返った時、朝はA職員に挨拶をし、午前中はB職員と仕事に励み、昼食はC職員と・・・など、利用者はそれぞれの場面に応じて、職員に求める関係性が違うことがわかります。利用者が職員を見極めている、と思われたエピソードを紹介します。

Hさんはみどり園に当園しても、他の利用者が当園し、更衣室で着替えを済ませるのを確認してから自分も行動を始めるという日がよくあります。これは、こだわりのような面もあり、着替えを促されることなどは苦手な方です。そのため、ホームでの朝のミーティングや仕事の時間にも間に合わないことがありました。ある日の朝、Hさんはいつもの通り、他のみんなを見送り、更衣室でマイペー

スに過ごしていました。ホームのI職員が「Hさん、(ホームの)ミーティングが始まっちゃいますよー」と、声を掛けるところ、自分のペースを乱されたことで表情は強張り、更に時間が掛かってしまいました。しかし、その数分後に今度は生産活動班のJ職員が「Hさん！仕事に間に合わなくなりますよ！急いでください！」と、まだ先程のことで悩んでいる最中のHさんに声を掛けるところ、表情は硬いままながらもスッと行動に移ることが出来ました。

どちらの職員も、本人のペースを大事にしたいという思いはありながらも、Hさん自身なかなか引っ込みがつかなくなってしまうのだろうと考えての言葉掛けでした。

Hさんは、いつもホームというのんびりした活動の中で一緒にいるI職員と生産活動班で時には厳しさも見せるJ職員との比較、「ミーティング」と「仕事」といった「コトバ(内容への見通し)」の比較など、判断基準が何であったかはわかりませんが、明らかに自分の気持ちをグッと抑えてくれたことが伝わってきました。職員(人)や「コトバ」という要素もあると考えられますが、J職員=仕事ということがHさんにとって「今は頑張る時なんだ！」という気持ちへ切り替わるきっかけになったのだと思います。

このようにチーム支援を行なうことで、職員に利用者の状況に合わせた支援を行なうための役割意識が芽生えたと同時に、支援に対する悩みも一人で抱え込むことなく、共有することができるようになりました。

私たち友愛みどり園は、今後もチーム支援を続けていき、職員一人ひとりが利用者全員を担当しているという自覚が持てるような職員集団でありたいと思います。

まとめ

日中活動の場の支援形態は、「事業者の都合」だけで決められてはならないものと思います。もちろん制度や物理的、人的条件等により制約される部分はありますが、「普通の 大人として」の暮らしを創っていく、という視点に基づいた形態を構築していく必要があります。

一般的に障害のある人たちの暮らし、とりわけ「人間関係」は狭められています。狭められた人間関係(集団)の中では「澁み」が生ずる、といわれています。地域社会における活動、経験、交流を広げるとともに、日中活動の場においても「集団」を意識した取り組みが必要であると思います。

今回報告した「複数の集団に属する意味」、「(職員が)複数の集団を担当する意味」は、まだ未整理の部分や未解明の部分があると感じていますが、総体としては「日中活動の場の支援形態」として大切なものと確認できると思います。今後、更に実践を深めていきたいと思います。

(レポート作成に当たっては、研究集団全体で検討しましたが、執筆を担当したのは以下の者です。)
大久保健・奥山直廣・金室修平

- ① 自治集団として、月2回廊下で開店する喫茶「きらら」の運営グループがあります。かなりの自主性、自治力をつけつつありますが、職員側の総括不足があり今回のレポートでは敢えて触れていません。次の機会を期したいと思います。
- ② このような活動形態を構想したヒントのひとつは、田中昌人らの近江学園での実践でした。もちろんその当時の対象は児童でしたが、次のような提起は新鮮なものとして受け取ることができ、参考としました。
 - ・一人の子どもの日課の展開をみたとき、質の違う三つの集団を保障しているか。この場合、質の違う三つの集団とは生活年齢の共通な生活集団、学習する力が共通の発達課題に立ち向かっている学習集団、生活や学習する力が違う人たちが働くことを通じて人間関係を豊かにしていく労働集団の三つ。
 - ・一つの集団に指導者が3人以上関係がもてるようにできているか。
 - ・一人の指導者が教育についての専門を生活・学習・労働集団の三つのうちから2領域選ぶことによって一つの集団の中だけで子どもを見る狭さを打ち破れるようにできているか。「講座 発達保障への道③」田中昌人
- ③ 以下の全障研全国大会発表レポート等で報告
 - ・「友愛みどり園における集団の発達について」(平成20年度)
 - ・「地域で息づく施設を目指して(ボランティア活動の実践)」(平成23年度)